

寛治先生（経皮的僧帽弁バルーン拡張術 P T M C の発明者）に御講演を賜りました。

また心臓病学会荣誉賞は、タコツボ型心筋症を世界で初めて報告された佐藤光先生に授与されました。

さらに、最終日午後の市民公開講座では、天皇陛下の冠動脈バイパス術を施行された順天堂大学の天野篤教授に御講演頂き、予定外の二つの会場で同時中継するほどの大盛況でした（第五十回肥後医育塾として公益財団法人肥後医育振興会様に大変御世話になり、ありがとうございました）。

一般演題では、多くの先生方に発表の機会が得られるように努力しました。後期研修医（いわゆる入局後のレジデント）、卒後一～二年目の初期研修医に対しては、奨励賞を設け、実地医家の先生方への参加を促すため（つまりご開業の先生方）、General Practitioner (GP) Session を最終日の日曜日に設け、全国から多くの開業医の先生方に御発表頂きました。

最大数の演題発表された施設に贈る Active Award は、千葉大学循環器内科教室が受賞しました。

若手研究奨励賞 (Young Investigation Award: YIA) には、四題まで絞り込まれた最終演題発表があり、大阪大学の原正彦先生が最優秀賞を受賞されました。

余談にはなりますが、学会前日の夜（九月十九日）に熊本城内の奉行丸で評議員懇親会を行い、三〇〇名以上の関連の方々にご参加頂きました。丁度、中秋の名月で、満月、さらに快晴でした。一般的に誤解されているかもしれませんが、

中秋の名月が必ずしも満月とは限らないこと、当日は全国的に快晴であったこと、それが学会の懇親会と一致したこと、このようなことはほぼ奇跡に近く、皆さんの思いが天も味方したのではと思われるほどの出来事でした。

末尾となりましたが、本学術集会開催にあたり、早い段階から御協力や御支援を賜りました公益財団法人肥後医育振興会様、熊本大学関係者、医師、医療関係者、熊本県、熊本市の行政、商工会、企業、ホテル関連、製薬会社等の方々、くまモン、また Japan Convention Services のスタッフの方々に感謝申し上げますと同時に、皆様の益々のご発展をお祈り致します。ありがとうございました。

### 第二十七回日本エイズ学会学術集会・総会報告

熊本大学大学院生命科学研究所血液内科  
学分野 教授 満屋 裕明

二〇一三年十一月二十日から十一月二十二日の三日間にわたり、第二十七回日本エイズ学会学術集会・総会を市民会館 崇城大学ホール（熊本市民会館）と熊本市国際交流会館で開催し、参加者は総勢約千二百名に上りました。今学会では『HIV/AIDS なぎ世代をめざす (Toward the HIV/AIDS-free Generation)』をメインテーマとし、二つの公開シンポジウムを含めた二つの学会シンポジウム、一七の共催シンポジウムおよび認定講習会を企画し、臨床・基礎・社会それ

ぞれの分野より四二三題と日本エイズ学会学術集会・総会史上最多の演題発表が行われました。

会長招請プレナリーセッションでは、『HIV/AIDS なぎ世代をめざして』をテーマに長年共に HIV/AIDS と戦ってこられた米国 Emory University の Raymond F. Schinazi 先生、独協医科大学の学長 稲葉憲之先生、米国 Stanford University の Douglas D. Richman 先生がそれぞれの専門分野から「エイズの終焉」に向けた講演をいただきました。世界中で広く用いられている逆転写酵素阻害剤ラミブジン (3TC) とエムトリシタピン (FTC) の開発者である Schinazi 先生より抗ウイルス薬を開発する際のサイエンスと Serendipity (新発見をする能力) の重要性について、稲葉先生からは本邦での HIV 母子感染対策に尽力された経験と外国の浸淫地域の現状についてお話しいただきました。また、Richman 先生より HIV 治療のためのステップとして①すべての潜伏細胞を同定、②潜伏のメカニズムの把握、③潜伏細胞に対し介入を行った際の、潜伏細胞を同定するアッセイ法の確立の三つが重要であるとご教授いただきました。

十一月二十一日に学会懇親会を開催し、約二百名が参加し、研究に関する情報交換の場として大いに盛り上がりました。学会懇親会において演題四二三より優秀演題が六題選出され、記念品が贈呈されました。

また、公開シンポジウムを二つと市民公開講座を一つ開催し、エイズ予防財団主催・日本エイズ学会共催の「公開シンポジウム1・エイズと悪性腫瘍」では H

I V 感染症患者にみられることの多い悪性腫瘍である悪性リンパ腫、肺癌、肝炎ウイルスが原因となる肝細胞癌およびパピローマウイルスにより発症する悪性腫瘍（子宮頸がんなど）に焦点を絞り、その予防と治療の最新の知見についてそれぞれの専門家が概説されました。「公開シンポジウム2・治療と社会的偏見の解消」では患者を支援する NPO・NGO 団体と医師、有識者などが集い、治療薬などの医学の進歩だけでは解決しない HIV/AIDS の問題、HIV 患者の QOL 等に関する課題が討議されました。

学術集会最後のセッションとして、「市民公開講座・HIV/AIDS なぎ世代をめざして」が松下修三熊本大学エイズ学研究センター教授の企画と司会で開催され、満屋裕明会長（基礎）・岡慎一先生（臨床）・池上千寿子先生（社会）・堀田佳男先生（ジャーナリスト）とそれぞれの専門家が一堂に会し、「早期治療が予防になる」時代に「私たちにできること・私たちがやらなければならないこと」がそれぞれの専門的立場から訴えられました。最後にくまモンが今回の「結論」を持って登場し、エイズ予防の啓発と検査実施の大切さを訴え、大盛況でかつ和やかな空気のなかで名残惜しい閉会となりました。

最後になりましたが、本学術集会・総会開催にあたり、多大なご支援を頂きました肥後医育振興会の皆様へ感謝申し上げます。